第五節　第二代東京音楽学校校長村岡範爲馳（むらおか はんいち）の音楽論説

理学博士である村岡範爲馳は嘉永六年（一八五三）十月十四日山陰鳥取の因幡国八上郡釜口村に生れた。幼名を範之亟といった。明治三年（一七七〇）十二月藩主の推薦により大学南校貢進生となりドイツ学部に入って理科を修めた。明治八年（一八七五）同学部廃止の後文部省報告課に出仕、東京女子師範学校訓導を兼任しついで東京大学医学部に出仕した。同十一年（一八七八）一月文部六等属に任ぜられ、ドイツへ師範学科取調べのため派遣された。ストラスブール大学で哲学博士の学位を得て十四年（一八八一）五月帰朝、東京帝国大学教授となり文部省官立学務局を兼任して本邦学制に力を尽した。十九年（一八八六）伊澤修二らとともに音楽学校設立の儀を文部大臣に建議した。二十四年（一八九一）八月伊澤修二のあとを継いで東京音楽学校二代目の校長となった。同時に奏任官二等に叙せられ、勅令第十三号学位令により物理学上研究の主要なる炭類の電流に対する性質、日本魔鏡の研究音響映画、音響用厚さ計、研磨によって起るビッミの研究などの論文実績によって理学博士学位第一号を受けた。二十六年（一八九三）九月東京音楽学校を辞したあと、京都帝国大学工科大学教授に任ぜられた。退官後同大学名誉教授の名称を授けられた。昭和四年（一九二九）四月二日没、七十七歳、正三位勲二等に叙されている。村岡校長は、物理学者の立場から「良い音楽を理解し、作るためにはまず耳を良くする訓練が必要である。その上に音楽の理論を研究し、さらにより高度な音楽を追究することによって高度な技術も生れるのである。歌曲の場合は形而以上の感情と形而以下の理学とに密接な関係を有するもの」であるから浅はかな音楽体験で教授に当るものではないことを警告している（『音樂雜誌』第十六号、明治二十五年一月、より）。次に掲載した論説は彼が東京音楽学校在職中に発表、あるいは講演したものである。

小學校教則大綱第十條に關する意見　村岡範爲馳

小學校教則大綱第十條中一二の誤解し易き點を擧げ次に余が信ずる處を述べて聊か之が解釋となさんとす

第二項に尋常小學校に於ては「通常譜表を用ひずして云々」とあり是れ幼稚の兒童に對しては專ら樂譜のみを用ひずして平易に教ふるを以て普通の授業法となすとの意なり即ち成るべく容易なる方法を旨とし兒童の耳に入り易き歌曲を口授々業し或は數字練習を以て教授すべきを示すものなり尤も場合に依ては唱歌掛圖を示し之に依て唱歌せしむるも別段說明をなさず兒童をして暗々裏中に音の高低の有樣を知らしむるを可なりとす唯唱歌教授の經驗に乏しき者は往々兒童想像力の範圍を超へて不必要の符號を教へ遂に音樂理論上の說明に涉る等の弊に陷ることなしとせず請ふ此等の點には充分注意あらんことを

又其第四項を見るに「歌詞樂譜は成るべく本邦古今の名家の作に係るものより之を撰び雅正にして兒童の心情を快活純美ならしむるものたるべし」とあり本邦古今の名家の作に係る短歌或は今樣の類は自然本邦の人情風俗に適切なるを以て教育上の効果も大なるべし樂譜も亦本邦古今の名家の作中に高雅端正にして兒童の心情を快活にし德性を涵養するに足るものあるときは採て之を用ふべきは勿論なり唯務めて本邦の樂譜のみ偏用すべきものと誤解すべからず抑も

歌曲の事たる形而以上の感情と形而以下の理學とに密着の關係を有する者なれば固より本邦人の感情の需むる處は之に滿足を與へざるべからざるも理學の進歩と關係を有する事項は着々之が改良を計らざる可らず左れば第四項中本邦古今とある辭を以て其意を害せざらんことを希望す

（『音樂雜誌』第十六号、明治二十五年一月）

次の講演録は明治二十五年二月、地方学務官の東京音楽学校参観のおりに学校唱歌に関して講演したものである。

諸君、今般文部省學事諮問の爲め、御上京の好機を以て本校をも、御來觀相成りしは、余に於て光榮滿足の至りなり。余は、今諸君を、各教室に誘引するに先つて、學校用唱歌及音樂教員等の件に關し、聊か希望する所を一言して諸君の注意を乞はんとす。

第一は、祝日大祭日の儀式に供する唱歌用歌詞樂譜の件なり。諸君御承知の通り、我が文部大臣は、省令第四號を以て、祝日、大祭日の儀式に關する規定を義められしが、其第一條第四款に「學校長教員及生徒其祝日大祭日に相應する唱歌を合唱す」とあり。依て諸學校に於て實際其儀式を擧行せんとするも、適當の歌詞樂譜を得ざるが爲め、往々杜撰の樂曲を用ふるの弊を生せんとせり。然るに祝日大祭日の儀式は、恐れ多くも、我帝室に執りて最も重要なる大禮なれば、其儀式を行ふに際し、敬意を表し奉らん爲め、唱謠する所の歌詞樂譜は、國歌の性質を帶びて、能く生徒の志氣を鼓舞し、忠臣愛國の情操を養成するに足べき者たらざるべからず。依て曩に、文部大臣は、其歌詞樂譜の撰定を當東京音樂學校に命せられ、更に其歌詞は千家尊福、鈴木重嶺、本居豐穎、高崎正風、丸山作樂、黑川眞頼、木村正辭、佐藤誠實、小中村清矩、勝安房諸氏に依頼ありて、既に過半落成したれば、之に樂譜を付することも、亦漸次其緒に就くべき見込なり。

次に一般の唱歌用教科書の儀は、過般發布ありし小學校教則大綱第十條の趣旨（第十條に付きては、別に余の解釋あり）に基き、且十年前。唱歌の小學校に入りしより、今日に至るまでの實驗に依て、唱歌集中歌曲の順序等を修正せるもの、及歌詞に解釋を附せるもの等を出版し、教員をして唱歌授業上の便益を得せしめんとの見込なり。又新製の歌曲は、音樂教員一般に渴望する處なれば、是亦續々製作頒布するに至るべし。

次に、音樂教員採用の事なり。尋常師範學校にては將來成るべく、本校の卒業生を採用あらんことを希望す。又中學校にては、本校の卒業生を採用せるもの幾と皆無の姿にして、實に唱歌は、未だ中學校の學科と見做されざるものゝ如し。普通教育の爲め、慨歎すべきことなり。世に、往々音樂は、人を柔弱にするものゝごとく信ずる者あるが如し。是れ、蓋し音樂の何者たるを考究するの至らざるより生ずるの說なり。試みに、古今東西の史乘に徵せんに、勁敵に投じ、壘址を陷れんとするに際し、一死國恩に報ずとの士氣を鼓舞して、君王の爲め、國の爲めに、一身を擲つ程の勇氣を出さしむるの一具は、即ち音樂に非ずや。勿論、今日俗間に行はるゝ音曲なるものは、所謂鄭衛の音にして、實に似て非なるものなり。其性質たる、獨り人をして、柔弱ならしむるのみならず、或は淫奔猥褻に

導くの恐あるものなり。固より端正高雅にして、德性を涵養するに足る音樂と同一視すべきものに非ず。中學校に於ては、音樂は師範學校の如く、後來人の子女に教ふるの目的を以て、學ぶの必要は、固より之れなしと雖、其生徒自身の教育としては、正に欠くべからざるものなりとす。況んや、中學校と雖、或は祝日大祭日に方り、其儀式を執行するには、唱歌は必然欠くべからざるの要具なるに於てをや。尋常小學校にして、普通教員の外、更に音樂教員を聘用する資力なき學校にては普通教員中に、成るべく音樂の心得ある者を聘用すべし。又高等小學校にして、生徒の數三四百人、又は七八百人以上もありて、多數の平行級を有する學校等には、必ず一人の音樂專門の教員を聘用すべし。此の如き大なる高等小學校には、一人の專門教員あるも、尙ほ不足を感ずることならんと信ず。果して專門音樂教員一人を採用し置けば、平日の授業は、勿論諸般の式日等に方り、必ずや萬事好都合のことあらん。右の目的を達するには、壯年の男子にして、聽感鋭敏なる者を撰び、縣費、或は郡費等を以て、多少の補助を與へ、凡そ三年間本校に入學せしめ、卒業の後、其縣其郡に聘用するに至れば最も便法ならんと信ず。

諸君御歸任の後新法令實施の際前陳の數件に就き、宜しく御注意の上、只管御盡力あらんこと、余が偏に希望する處なり。

（『音樂雜誌』第十七号、明治二十五年二月）

〔論説〕「普通教育における音樂」　村岡範爲馳

『音樂雜誌』明治二十五年九月、十一月、十二月、二十六年一月、二月、三月号に連載。未完で終っている。村岡校長は同年九月に東京音楽学校を辞している。この論説は情操教育に音楽がどのように有効な作用をするか、人間のみならず動・植物にまで及ぼす効果を古今東西にわたる記述を引用して科学的にまた生理学的に説いている。この時代で「Musik Therapy 音楽治療」にふれている点が注意をひく。

普通教育の諸學科中、讀書算術の如く人生直接の用を爲すものあり、又音樂圖畫の如く審美の思想を起し人の性情を養ひ、以て間接に人生を益するものあり、是等の學科は共に完全なる人物を養成するの具ににして、普通學科中一として缺く可からさるものなり、今夕は數多の教育家諸氏在席の好機に接し、幸に一言の榮を賜はりたれば、普通教育に於ける音樂に就き、聊か一言して諸君の注意を乞はんとす、

先つ第一に、音樂なるものは物を感動するの勢力最も大なる事を述んに、希臘の樂人アリヲンの歌は能く死を起し命を救ふと云へり、又アムヒヲンは其歌力を以て石塊を動かし行雲或は飛鳥を停め、ヲルホイスの歌は烈風を鎭め焰魔を笑はしめたりと云へり。是等は音樂の美を稱讃するの語にして、人をして彼の「鬼神をを感動す」[ママ]又は「眼光紙背に徹す」等に類する侈言と同一視せしむる事なしと云ふ可からず、勿論過大の語たるを免れざるも決して荒唐無藝[ママ]にして形跡もなき事と構造せるものにあらず多少事實あることなり、猶ほ次に實地の諸例を陳述すれば自ら解氷する處あらんと信す」諸君御承知の通り、中等唱歌集に保昌なる曲あり、藤原保昌嘗て多夜に微行せしや、袴垂なる盜賊ありて保昌の衣を奪はんとせり、保昌は悠然として笛を吹きしが、賊之に感して自首せりと云ふ。往昔支那の

聖賢は平素腰間に玉を佩び、右に徵角左に宮羽を鳴らして、辟邪なる心の入る事を妨けり。千八百七十年普佛兩國の戰端を開ける時、普國に於て懸賞撰定せるライン曲の如きは、能く普國の士氣を激昂して佛國の讎を防き、敵兵をしてライン河を超ゆることを得ざらしめたり。現今佛國の國歌と成たるマルセヒーズ曲の如きは、佛國人を激發するの勢力殊に劇しく、嘗て叛乱の媒助たりし事ありたるは歴史上照々たることなり、其外音樂が人を淫逸に導き、或は音樂を以て暴君を切諫する等其作用は必すしも悉く善なるに非すとも雖も、其人心を感動するの勢力極めて大なる事は爭ふべからざるの事實にして、現今歐州に於ては音樂を以て疾病を治療するの一具となさんとし、既に音樂治療（ミュジコテラピー）なる術語あるに至れり、左れば、アリヲンの歌に起死回生の力ありと云ふも全く無根の侈言と云ふべからず、

音樂感動の効力は獨り人類に止まらず、又能く禽獸に及ぶものなり、嘗てチヤリネなる曲馬師あり東京に來りて興業せり氏は凡そ十疋計の馬を曲馬場に並べ置き傍らなる樂隊が進行的の樂曲を奏せしめしや、別に人の之を馭することなきも、衆馬は蹄足を揃へて進行せり、右の馬は平生馴らしたるものとは申すものゝ、音樂を感するにあらざれば決して斯の如き事を得さるへし。アフリカを旅行する人笛を吹きて鰐（ワニ）の難を免れ、印度旅行人がバイオリン曲を以て象の侵襲を免かれたることありと云ふ。或る獨逸の婦人が畜養せる犬は吹笛の或る一定の音を發する毎に必ず吼へたりと云へり。余は印度セイロン島に於て蛇遣（へびつかい）を見しに、竹籠（たけかご）の中に入れたる蛇は、主人の笛聲を聞きてニヨロ〳〵這ひ出てゝ種々の藝をなせり。此頃聞く處に依れは蛙の一種に河鹿（かじか）なる者ある由、其聲が鹿に類するを以て此名ありと云ふ、此蛙は極めて美聲を以て鳴く由なるが、初め未た鳴きを能せさるや、笛聲を以て之を練習すれば、漸々美聲を發するに至る、其最も能く鳴くものは東京にて價二十五圓に上れることありと云ふ、支那詩題に池亭蛙などゝあるは此河鹿のことなりと云ふ。或る人夜間ピアノを彈せしに、鼠あり來りて其傍に止まる、其狀ピアノ曲を解するものゝ如きを以て、之を驗さんか爲め暫時彈琴を止めたるに、鼠は直ちに去り、主人再ひ彈せしに鼠復ひ來りて之を聞き、斯の如くすること數回にして其琴曲を感するに相違なき事を認めたりと云ふ。兩三年前ネチューア新聞に記せるに或る人愛養せる金糸雀（かなりや）あり、折々籠より出し室中に遊はしむ、一日主人はピアノを彈せしに鳥は主人の腕上に宿り、腕は彈琴の爲め終始動搖するにも拘はらず之を去ること、なく終には自ら囀り出せりと云へり。余は幼時數個の金雀（ひは）を飼養せしが、學校より歸宅し讀書の復習を爲せる際、音聲の抑揚高低が歌曲に類することある時は、金雀（ひは）は必ず之に和して囀つれり。金糸雀（かなりや）又は金雀（ひは）の如きは身自ら秀逸の音樂者なれば其音樂を感すること他の禽獸より甚しきは當然の事と云ふ可し、左ればアムヒヲンの歌が能く飛鳥を停めたりと云ふも、必しも無根の侈言と云ふ可からず、

音樂が物を感動するの勢力は獨り人類と禽獸とに止まらず、又無生の木石等に及ぶものなり。箏曲集落梅の歌に「花も散るなり笛の音に」とあり。謠曲の名人は能く障子を謠ひ敗るとは古來言ひ傳ふる事なるが、余は因州公の能役者藤田某氏の宅に於て障子の紙の振へるを實地に見しことあり。東京音樂學校の演習に於て、帽子を手に持ち乍ら聞く時は、間々帽子が振動することあり、之に類するこ

とは西洋のオペラ等に於ては屢々實驗することなり。羅紗を敷きたる机の上に指を廣げて手を載する際、聲量の大にして且つ低音の人來りて談話する時は、指間にくすぐる如き感を起すことは屢々實驗せり。アルプス山中に岩窟あり、高き數仞の處より道路の上に臨む、午飼が其下を通行する時は、必す牛の鈴を執り去るなり、是は岩窟が鈴の音に感して碎れ落るの恐れありと云ひ傳ふるが爲めなりと云ふ。流出する水の曲線は或る音に感して其形を乱すことあり。殊に著しきは所謂「感し易き炎（ほのほ）」なり、是は瓦斯燈に用ふる石炭瓦斯を小なるガラス管に通し、二三寸上に細密なる金網を置き、上より火を点すること安全燈の試驗の如くして、金網の上に筆尖の如き炎を作れば出來るなり、此炎は太鼓を叩くも、怒聲を發するも其音低き時は馬耳東風の如し然れとも音高きときは覿面（てきめん）に之を感し、始め筆尖形なるものが全く潰れて平たくなるなり、其音を發する處は決して炎の傍に在るを要せず、故に發聲者の息氣の爲めに形を變するにあらず、發聲者は室隅にあるも又は室外に在るも可なりとす、此炎は人耳の聞く能はさる高音を感するが故に物理學上應用あるなり。又石炭瓦斯を一端を細く鋭らしたるガラス管に通し、長さ壹尺五寸許りの炎を作る時は一種の感し易き炎を得るなり、此炎は音の高低等に依り色々に其形を變す、或は長さ短縮して半分となり、或は彫（さいら）の如き形となり、或は折釘の如くなり、又は傘の如き形を執るなり、若し此炎を作り置き、其室内に於て雄辯家をして流暢なる演說を爲さしむる時は其抑揚高低に應して右の如く種々に其形を變するの狀、恰も演說を理解するものゝ如し。是等の諸例を以て考ふる時はヲルホイスの歌が烈風を鎭め、アムヒヲンの歌が石塊を動かし、行雲を停めたりと云ふも、丸て跡形も無き事と云ふ可らす、尤も焰麗樣の笑つた事は保證致しません、

右の實例を以て之を視れば音樂が物を感動するの勢力極めて大なること明なり、音樂は其感動の力を以て能く猛惡の人を温和にし、怯懦なる者を奮起せしめ、人の德性を涵養し、國の風俗を淳化するものなり、次に種々の實例を擧けて其國家を經營し人民を教育するの必要なることを證せんとす。

樂記に曰く禮樂刑政其極一也、所以同民心而出治道也、又曰禮樂刑政四達而不悖則王道備矣と、支那に於ては舜既に五絃の琴を作り、夔に命じて典樂の官に當らしめ、以て人民を教へり、支那の文物尤も盛なりしは周の時代なり、其然る所以のものは蓋し學校の組織能く整ひて、普通の諸學科完備せるに依るなり、家有塾、黨有庠、州有序、國有學、以て大中小學校の組織備はれるを知るなり、詩書禮樂射馭書數の諸學科の如きは幾んど近代の普通科を網羅せるものと謂ふ可し、即ち詩書は文學なり歷史なり、禮は修身なり作法なり、樂は音樂唱歌なり、射馭は体操に、書は習字に、數は算術に當れるなり、孔子の語に詩を學べば多く鳥獸草木の名を知るとあり、左れば博物學科も亦其端緒を開きたるものと云ふべし、詩は邶鄘衛鄭等の人情風俗を咏ず、左れば地理學も亦全く缺けたりと云ふ可からず、右諸學科の中に於て詩と樂とは關係の最も密なるものなり、詩は詩經にして現今の唱歌集の如く、元來歌詞樂譜の両樣を備へたるものなり、今其詩（歌詞）を存して樂譜を亡なひたるは、蓋し記譜法不完全にして周亡び樂衰ふるに從て漸々消滅せるものならむ、南陵、白華、華黍等の如きは有聲無詞の樂にして、現今東西の諸樂に於て

も其例多きものなり、無詞にして樂譜を亡なふ故に獨り其曲名を存するのみ、樂は雲門、咸地、大韶、大夏、大護、大武なる六樂、即ち黄帝、堯舜、禹、湯、武なる古聖天子の德を稱賛するの樂曲舞蹈等を始めとして、廣く人情風俗を演するものなり、六樂は即ち祝日大祭日の唱歌に當る數千年前の周世にして既に此式を擧く其教育制度の完備せること思ふべきなり。

孔子の言行中に詩の德を稱し樂を好むの事甚た多し、曰く詩を學ばざれば以て言ふなし。曰く周南召南を學はざれば、正しく面に牆して立つが如し。曰く詩に興り、禮に立ち、樂に成る。曰く禮樂は斯須も身を去るべからず、曰く禮樂興らざれば刑罰中らず。曰く樂は倫理を通するものなり。曰く風を移し俗を易ふるは樂より善きはなし。韶を謂て曰く美を盡せり又善を盡せり、武を謂て曰く美を盡せり未だ善を盡さず。顏淵邦を爲むるの道を問ひしや曰く樂は即ち韶舞鄭聲を放ち云々と。孔子齊に在りしや韶を聞き、之を學ぶこと三月、肉の味を知らず、歎して曰く圖らざりき樂を爲すの斯に至らんとはと。孔子磬を衛に擊つ、隱士あり其經國に志あるを覺れり。孔子人の歌を聞き、善なれば則ち之を復せしめ然る後自ら之に和す。孔子宋に行く匡人簡子、甲士を以て之を圍む、子路怒り戟を奮ひ之と戰はんとす、孔子之を止めて曰く惡ぞ仁義を修めて世俗の惡を免れざるものあらんや、夫れ詩書の講せざる、禮樂の習はざる是れ丘が過ちなり、若し先王を述べ古法を好むを以て咎めらるゝが如きは則ち丘が罪あらざるなり、命なる哉、歌へ予れ汝に和せんと子路琴を彈じて歌ふ、孔子之に和す、曲三び終る、匡人甲を解て罷む。孔子某琴曲を師襄子に學ふ問はずして其文王操たるを覺る師襄子敬服す。

孔子陳蔡の間に窮し火食せさること七日、其間常に絃歌す、顏回適々菜を擇ふ、側に子路子貢あり、相與に言て曰く夫子再ひ魯に逐はれ、迹を衛に削られ、樹を宋に代られ、商周に窮し陳蔡に圍まる、夫子を殺す者罪なし、夫子を籍する者禁なし、尙絃歌鼓琴未た嘗て音を絶たす、君子の恥なき此の如き乎と顏回以て應することなし、入て之を孔子に告く、孔子琴を推し喟然として嘆して曰く賜とは細人なり、召して來れ、吾之に語らんと、子路と子貢と乃ち入る、子路曰く此の如き窮と謂ふへきか、孔子曰く是れ何の言ぞや、君子道に通するを通と云ひ、道に窮するを窮と云ふ、今丘は仁義の道を抱て以て亂世の患に遭ふ、何の窮か之れ爲さん、故に內に看みて道に窮せす難に臨みて其德を失はす、天寒既に至り霜雪既に降りて吾れ則ち松柏の茂るを知る、陳蔡の溢は丘に於て其れ幸なる哉と、孔子削然琴に反て絃歌す

孔子武城に行き絃歌の聲を聞き莞爾として笑て曰く鷄を割くに何ぞ牛刀を用ゐんと、子游對へて曰く昔古偃や之を夫子に聞く、曰く君子道を學へば則ち人を愛し、小人道を學へば則ち使ひ易しと、孔子曰く二三子、偃か言是なり前言之に戲るのみと、孔子衛より晉に入らんとす趙簡子か竇犨烏犢及舜華を殺すを聞き河に臨て嘆して歌ひ曰く美哉水洋々乎丘之不濟此命也夫と乃ち轅を轉して鄒に歸り槃操を作り以て其薄命を哀めり、孔子晩年多く其弟子を失ひ又自ら病む、一日子貢見ゆることを請ふ、孔子方に枝を負ひ門に逍遙す、曰く賜や汝來ること何そ晩きや、孔子因て歎して歌て曰く太山壞乎、梁柱摧乎、哲人萎乎、云々」孔子の詩を稱し樂を好むや、獨り其善

き者に就て然るのみ、其惡しきものに至りては常に之を排斥せんことを務めたり、嘗て顏回に言て曰く鄭聲を放てよと、孔子嘗て魯に相たりし時、齊の景公、魯と好を結はんと欲し魯の定公と夾谷に會す、景公四方に樂を奏せしむ、旂旄羽祓予戟劍撥鼓譟して至る、孔子曰く吾か兩君好會となす、夷狄の樂何ぞ此に於てせんや、請ふ有司に命せん、有司之を却く、樂人去らすして左右晏子と景公とを視る、景公心に怍ち之を去らしむ、暫くにして更に宮中の樂を進む、優倡侏儒戲をなして前む、孔子曰く匹夫にして諸侯を熒惑する者は罪當に誅すへし、請ふ有司に命せん、有司法を加へ手足處を異にす、其後齊人は魯の孔子を用ゐて遂に天下に覇たらんことを恐れて私かに之を沮せんことを欲し卒ち齊國中の女子好き者八十人を選ひ皆な文衣を衣せ、文馬三十駟を添へて魯君に遣る、季桓子之を受け三日政を聞かず、孔子遂に行り屯に宿す、樂師已送り曰く夫子は則ち罪なし、孔子曰く吾歌ふ可ならんか、歌ひ曰く彼婦之口可以出走、彼婦之謁可以死敗、優哉游哉聊以乃歳」

孔子の樂を好むや正樂と雖も之を興すの法其宜しきを得さるときは必す痛く其罪を擧く、嘗て季氏が八佾庭に舞するを誹り曰く是をも忍ふへくんば孰か忍ふべからさらんと、三家者雍を以て徹す、孔子曰く相維辟公、天子穆々、奚ぞ三家の堂に取らんやと、又曰く人として不仁なれば禮を如何せん、人として不仁なれば樂を如何せんと、孔子魯の禘を謂て曰く禘既に灌してより後は吾れ之を觀るを欲せすと

右の諸例に依て之を見れば東洋德育の泰斗と仰がるゝ孔子は、音樂に於て如何なる思想を抱きしやを知るに足るべし、諸君は勿論孔子の言行は充分御承知の事なるも、通常人の孔子を見るは主として道德の一点にあるものゝ如し、今音樂の点より孔子を見るときは、右の如き非常なる音樂上の履歴あるを見る、而して其履歴たるや皆道德と相提携するものなり、吾人は是に依て一層音樂が德育に關するの至大なるを知る、或曰く孔子の音樂を稱する斯くの如く大なるは、蓋し孔子の性質偶然音樂を嗜好せしが故に然るならんと、余曰く夫れ或は之れあらん、然れ共余は音樂其物が道德上至要の原素なるが故に、孔子の之を好むや斯の如く甚たしかりし事を信するなり、試みに禮の一事を見よ、若し禮の一点より孔子の履歴を觀察せば、其偉大なること決して音樂に讓らざるべし、而して禮は常人に執りては、音樂の如く人を感動せしめ、或は之に快樂を與ふるものにあらず、然るに孔子の之を好むこと彼が如く大なる所以のものは、蓋し其道德に關することの大なりし故のみ、是を以て余は孔子の音樂に於ける其禮に於けるが如きを信するなり、されば禮樂は均しく是れ風教を矯め、社會の秩序を保つの必要具たるや明かなり。

孔子の音樂に關する言行は略之を述べたり、尙進んて西國の賢哲は音樂に就きて、如何なる思想を有せしや一二著大の人に就きて觀察を下し、以て音樂が人の德性を涵養し、國の風俗を淳化するの藝術にして、現今小學校に科する數時間の唱歌の如きは、之を古希臘人に比すれば眞に兒戲に類することを明にせんとす、

古希臘國教育の原素は音樂及体操にして、希臘人は音樂と体操の間に生長せりと云ふも可ならんか、殊に音樂は其平素生活の大部を占領し、祝賀宴會等には幾と之を欠くことなく、勿論其席に於て彈琴唱歌を能くせざるは、中人以上の大恥辱たりしなり、而して音樂

を忽にするときは人生を野蠻に歸することゝし、之を能くするものは操行自ら端正に至るとせり、且つ希臘人が音樂を重ずるの大なることは、音樂なる語を以て精神心意に關する教育の全部を意味せし一事を以て知るべし、又曰く音樂は秩序の創立者なり、音樂は天神が人類の德行を修むる爲に下賜せるものにして、其曲節と調聲とは能く人の情性を牽制するものなりと、曰く音樂を修むるものは必ず廉潔にして百般の善と美とに別ると、希臘人は又音樂を以て國家を經營するの智略を與へ、義勇の氣質を養ふものとせり、殊に勇將の軍歌の如きは、無上の教育力を有するものとせり、希臘人はキタラ、笛、ライル家を名つけて教育家と云ひ、ホーメルは唱歌家を名けて賢者と呼べり、希臘の音樂は支那に均しく詩歌と密接の關係を有するものにして、殊にホーメルの詩を尊重すること、支那の詩經に於けるが如し、ニクトラス嘗て誇て曰く余が父は余を教育して賢人たらしめんと欲し、ホーメルの詩を洩なく學はしめたり、故に余はイリアス、オヂッセの歌の如き一として暗記せざるはなしと。

希臘人の音樂を尊重すること斯の如く大なるに至りしは蓋しピタゴラス與りて大に力ありと云ふべし、ピタゴラスが希臘の音樂に於るは蓋し孔子の支那音樂に於けるに讓らさるべし。

ピタゴラスは今を逝ること凡そ二千四百年前即ち孔子と幾んと同時の人なり、氏はバビロンに於て十二年間數學及び音樂を研究し後ち其鄕土サモスより以太利亞の希臘領諸府に來りし人なり、氏は精神身体共に衆に勝れ其門人より非常の尊敬を受けたり、而して氏は精神を清淨にし道德の心を鞏固にするに五官の力を以てするの教法を說けり、氏の教法は一般に希臘國中に廣まりて五官中殊に聽官は德育を幫助する爲め最も必要なる機關となれり、氏曰く美音の美觀に勝る所以は其性鋭敏にして變化多く且つ何時にても之を得ることの容易なるか故なり、曰く音樂は感覺を鋭敏にし發聲を訓練するを以て又能く社交上の機智を發達せしむと曰く音樂は美の最上なる泉源なりと、氏の教育の目的は美を以て人の精神を充滿するにあり、氏は笛を以て靡々柔弱なる樂器なりと之れを好まさりし、之れに反しライルは其性質嚴格なりとて殊に珍重せり、氏は自ら作曲し又人をして作曲せしめ人情を寫出し或は以て憂苦を慰撫し或は無稽の願望を抑制し或は怯懦の恐懼の心を除き去る等に用ひたり。又大家の妙句を撰みて樂曲に合せ以て高尙なる感情及ひ高尙なる思想を人民の心中に貫徹せしめんことを勤めたり、氏は深沈清雅なる聲音を以て人の性情を强固にするものとし、每朝寢床を離るゝや先つ精神を清淨にせんが爲に暫時ライルを彈し、又每夜就眠の前に於ても、亦之を彈して日中百般の煩擾を洗除し心意を沈靜せり、氏が音樂に關する言行の中に就き最も奇にして酷なるは嘗て氏が最も親愛せる門人に五年間の無言を命したる一事なり、其目的たるや獨り其無言に耐ふるや否やを試みんが爲めのみにあらず同時に美音を聞かしめて其音樂の美を感受するの性を確實にせんが爲めなり。氏常に以爲く音樂の旋律は殊に規則正しきものなるを以て規律秩序の教となり、調和は能く人の友愛の情を起し、リズムは數理幷に希臘人の最も尊重する体操にも存するものにして人の豪俠の氣質を養ふに適するものなりと。斯の如くにしてピタゴラスは音樂を以て勇、美及ひ愛の三者を養なひ、其結果たるや希臘人の道德と學藝とは當時共に肩を比すへきものなかりしは吾人か歷史の上に於て明かに知る處なり、

是れ實に希臘教育の精華とも云ふへきなり、而して斯の如き結果の音樂の力に依て生せしは他に比類少なかるへし、彼の音階、音程、管絃の振動數等の研究の如き、原子説、地球廻轉説の如き皆音樂教育の結果なることを考ふれば音樂の効力は强大なりと云はざるべからずピタゴラスの外ソロン　ソクラテス　プラトー　アリストートル　アルキメデス等の學者も均しく音樂を以て精神を高尚にし才能を啓發し性情を廉潔にし智力を喚起するの要具なりと云へり。茲に一話ありマセトニア王フヰリツプはアリストートルを信すること殊に篤く、嘗てアレキサンドルの出生せしや書を送り曰く、余が愛するアリストートルよ余は今幸に一男兒を擧けたり、余は天神に對して深く其賜物の厚きを謝せさるを得す、是れ獨り男兒を得たるが故のみに非ず、天神が此男兒を余に惠與せる時の宜しさき故なり、即ち汝アリストートルの在世に賜はりたる故なり、余は汝が此兒の保育を擔任して天下に覇王たるの人たらしめんことを期するなりと、斯くてアレキサンドル年甫め十三歳の時アリストートルは其師傳に撰拔せられしより殊に音樂詩歌の教育を施し加ふるに体操講演術等を以てし終にアレキサンドル王をして古今稀有の大業を爲さしめたり。アルキメデスも亦大に詩歌音樂の効用を信しホーメルを教授せさるものあるときは直ちに其頰を繫ちたりと云ふ。希臘文学の華とも稱すへき慘劇は其對話皆音樂的の抑揚を有し聽衆を感動せしむること最も强かりしと云ふ、イースキラスの作に係る慘劇に於て五十人をして合唱せしめしや非常に聽衆の恐怖を來たせしかば爾來法律を以て合唱人數は十五人に過く可からずと制限せしに至れりと云ふ、是等の唱歌は或は和聲を備へたるも計り雜しと雖とも之を徵するに足るの樂譜後世に傳はらさるは惜む可き事なり。右の如くにして希臘に於ては音樂を尊重すること彼が如く甚しく其効果彼か如く大にして古今東西幾と其例を見さる所なり之に反して羅馬人は僅かに希臘の末流を酌まんとして能はず音樂を以て勇、美、情を養ふことを能はずして反て優柔粗俗の風俗を助くるに至れり、羅馬の滅亡に當りて音樂は教會用音樂及ひ俗樂の二途に別れたりしが共に稱するに足るものなし。

降て紀元後十一世紀頃に至り佛國に於ては南北諸部に於て詩歌の大家輩出して宮廷音樂を起し暗黑粗野の時代中に詩歌と音樂と相提携して優美沌良なる風俗を興したり。獨逸に於ても十二世紀中バルバロザ王の下に於て起りしモンネゼンゲル家の如きは其風教を攬起せるの功決して右佛國の詩歌に讓ることなし、其後獨逸の諸都府に於て樂人輩出し其運動と音樂の發達とに伴ひて政治上の制度を改良するに至りたるは支那人が音樂を尊んて禮樂刑政と並立せしめ、希臘人が「音樂は教育の勢力なり」と云ひし言の虛ならさるを證するものなり。又十五六世紀に至ては獨逸國ニュルベルク人ハンス、ザクス一の大音樂會を組織して子弟を教育し時々演奏會を開きて公衆の批評を開き大に音樂の進歩を計りたり、氏が事業の如き偉大なるものは蓋し英佛國に見さるところなり。

新教の元祖なるルーテルの如きも教育を重すること最も大にして其音樂上の功も亦偉なりと云ふへし、ルーテル嘗て云へることあり曰く余若し子女を有せば之に教ふるに獨り語學歴史のみを以てすることなり必す又音樂唱歌及ひ數學の教育を施すへし、是れ希臘人の依て以て偉大の事業を爲せし先例あるか故なり余は今に至り幼時に

於て詩歌を學べることの不充分なりしを悔るなり云々又曰く音樂は天神の惠與せる賜物の中に就き最も美にして最も驚く可きものゝ一なり、音樂はサタン（鬼）の敵なり、音樂は法規なり主刑なり、音樂は人を温良にし其操行を正し其心意智能を啓發するものなり、又曰く樂典は詩歌を活物にし惡心を排除し悲哀を慰愉し、憤怒驕傲等百般の獘惡に遠からしむるものなり、又曰く余は常に音樂を好んで止まず、此術を能くするものは其性善良にして多事に巧能なり、又曰く音樂は必らず學校の一科たらさる可らず學校教育は必す唱歌を能くせさるべからず之を能くさせるの人は余は教師の尊敬せさるなりと、ルーテルを幫助して宗教を改革し學政を改良せんフヰリツプ、メランヒトン氏曰童兒は年の長幼を論せず毎日午飯后第一時間は音樂練習を爲さゝる可らずと、ルーテルの後新教僧徒も亦大に教育を重んしウルリヒ、ツウングリーの如きはルーテルの如く音樂を尊重すること殊に大なりし、氏曰く測量、圖畫、音樂、繫劍は人たるもの一般に學ばざるべからずと、ファレンチン、フリードラント氏曰く唱歌を學へよ我が愛する兒童よ、唱歌を學べよ、汝等他日天に登れは天孫（エンゼル）必す汝等の合唱を許さん、榮と云はさるへけんやと、ニコラス、ヘルマンはヨアヒスタールの學校長にして繁忙なる校務及ひ授業の傍ら自家に於て其童兒に唱歌を教へ自ら新唱歌及ひ其授業の方法を自身の子女に試み其方法熟して後之を學校の童兒に課し又大に寺歌を改良しルーテルの歎稱を得るに至れりアモス、コメニウスは彼のヂダクチカ、マグナ中に論して曰く家には母親學校（ムッテルシュレー）を要し、各組合各村各市には平民學校を要し、少しく大なる市には中學校を要し、各國には大學校を要す、而して其教授たる皆其目的を一にせさるべからず唯其差は（中略）而して平民學校の童兒は民間普通の諸曲に通し少しく熟達せるものは美術的の唱歌を學はさる可らす云々。

今世普通教育の大成を促したるは、蓋しペスタロッチー氏に如くものあらさるべし、ヂンテル氏曰くペスタロッチーは下級教育の王にして、ソクラテスは上級教育の王なりと、ペスタロッチー氏は人身に伏藏する百般の能力を完全無缺に發達せんことを期し、普通の教育を以て職業教育の本源となし、唱歌を以て算術幾何圖畫等と共に平民學校の普通科中に編入せり。其弟子カウウェラウドライ、ストヘンニヒ　クラツチンドルフ　ミツトプロイスステーゲル氏等は、ペスタロッチー氏の原理に從ひ、獨乙國の教育事業を一新したるのみならず、遂に教育を以て國民的事業となしたるの功績は、偉にして大なりと云はざるべからず、而して音樂唱歌の一科に於ては、殊にプアイフェルネゲリー等はペスタロッチーの原理に基き、童兒の神身（ママ）に伏藏する處の音樂力を啓發し、以て其獨立の所有物となさん事を務めたり、兩氏は平民學校童兒の唱歌の能を發達して、樂譜を讀むこと書籍を讀むか如く、或は日常の賣買物を計算する如く、新曲と雖も一見の下に唱歌し得るに至らしめ、以て國民的唱歌を作らんことを務めたり、然れ共惜むべきは兩氏がリズム、樂曲及發想の三音を分離して教授し、其方法細詳に過きて實益的ならず、從て其功は勞を償ふに足らざりし一事也、是れライプチヒの教授リンドネル氏が兩氏の授業法を評して、「豫備豫習の爲に過分の時間を費し、亂りに倦屈來をすのみにして、肝腎なる唱歌に及ふこと甚た稀なり」と云ひし所以なり。右兩氏に反し巧みに唱歌の教授を實

施せしはルードウイヒナトロフなり氏はボッダム師範學校を改良して摸範學校となし、後ミュンステルに於ける學校評議員となり、殊に師範生徒の唱歌教授に意を注き、自ら唱歌集を著述し、豫習と唱歌とを代る〳〵編列して、生徒の實力を養ひ且つ唱歌を嗜好せしむるに至らしめたり、氏は又唱歌教授に數字練習の新法を起したる人也。其後普通教育に於ける音樂に於て、其功績の大なるものはヂンテル　ヘンチエル　シルヘル　エルク　カロウ等の諸氏なり。

右に述へたる處に從て明かなるが如く、音樂は古希臘時代に於ては幾と教育の本源とも云ふべき有樣なりしが、近代に至りては人事益々多忙にして人世必要の事項を增加し、普通教育上必要の諸學科も其數少なからざるが爲に、音樂を以て教育上最上の必要物となすこと、希臘時代の如きを得ざるに至れり、然れども音樂唱歌が人の德性を涵養するため欠くべからざるの一科として、倫理と共に重せらるゝの一點に於ては古今異なることなし。

今世の教育家は音樂に就き論ずる處少なからざれとも其論點多くは授業上の事項にして其必要効用を說くこと、孔子ピタゴラス等の如く切なるもの少しとす、是れ蓋し古人之を論ずることの詳にして、幾と餘蘊なきを以てなり、然れ共今世大家の言にして、往々耳新らしき事なきにあらず、左に其一二を擧けて參考に供せんとす。

ケルン氏曰く唱歌教授は自由講演の教授と相伴ふへきものなり、夫れ唱歌は講演の一種に外ならす、然かも人の思想感情を心より心に通つるものなり、聽官聲官の發達は自己と他人の聲色に依て、相互の心情を正しく觀察し、判斷するの能を銳敏にする者也、唱歌は獨り人の美術思想を養ふが故に其價値あるにあらす、能く他人の快痛を感受し同情を交換するの効力を有するが故なり、又曰く多人の合唱は恰も人心を收束する糸條の如し、各自をして全体の一部たるの意識を生せしむ、又曰く愛國的の精神を陳述するは詩歌に如くはなし、之を發言するは唱歌に如くなし又曰く生徒をして各自は大なる全体の一部たる意識を生せしめ、全体の結果の善惡は主として各自が自己を以て全体の隷屬となし、全体が要求する處の規律に從ふにあることを知らしむるものは、音樂体操の二科なり、又曰く協同の意識は獨り各級室内に止まらずして、全体に聯帶することを要す、而して此協同に必要なるものは唱歌なり、故に唱歌を教室内練習の外或は講堂に於てし、或は体操場等に於てすべし、其他每週の終始、學期學事の始業終業式、新入生徒入學式卒業式、教員の就職退職、慶賀死亡等に關する式場、大祭祝日、凱旋祝日の式等凡て校員一同集合する時には、必ず合唱することを要す」オケン氏曰く人は見を以て世界に入り、聞を以て社會に入る、ケール氏曰く民歌は天然佳美自由にして、最も平民學校に適するものなり、民歌は質撲簡易にして絕て牽强の辞氣理非の語勢、虛飾の句法を有せず、故に純粹の民歌は切實にして無限の猛力を有し、質撲にして愛すべく貴重にして良く人を感動す、獨乙の民歌は眞に獨乙人民の高德を表示するものなり、獨乙の民歌は獨乙人民の快樂悲哀、愛惡、歡喜痛歎、傲意謙讓を含むものなり、ア、ベ、マルキス氏曰く民歌は不死の音樂なり、民歌は太古の歌なり又現今の歌なり、而して將來の歌たるべし、民歌は變ずべからざるの神樂なり云々、ハインリヒ、ハイネ氏曰く民歌は驚くへき幻魔なり、歌人好て之を擬作すと雖、其歌は恰も人工の礦水の如し、化學上の化合分析を以て巧みに其成分

を同一にするも、常に天然礦水の美味を與ふること能はざるに異なることなし、エフレム氏曰く謹慎なる唱歌は能く石の如き心を溶解して涙滴とす」セキスピーア曰く人として音樂の心なく、又優美の調曲の爲に感動せられざるものは、其性必ず信義に背き詐計を逞くするに適す。トローグ氏曰く百般の憂愁は幻歌に依て消ゆ。又曰く獨乙の唱歌は幻劑なり、又救命噴水なり、我獨乙人民は古今治亂の別なく依て以て其活氣を養ひたるものなり、獨乙の唱歌が國歌の危急に際して奏せる處の大功は、我歴史に據て明かなり(中略)、千八百七十年の後幸に敵國の我を害せんと企つるものなし(中略)然れば唱歌は又其功を奏し其技量を顯はすの餘地を有せざるや曰く之れあるなり、吾人の唱歌は以て神に使ふる所以なり、以て君に使ふる所以也、又義勇の士氣を養ひ國民の操行を整理する所以の者也、吾人をして天神と共に我父母の國を守らしむるものなり、ウロン曰く凡そ人心を感動するの尤も甚たしきは音樂に如くはなし、蓋し聲音一たび人身に入るときは、其腦を動かすこと最も著るしくして他物の及ぶ所にあらず、是を以て獨り人類のみならず禽獸の中にも亦音樂を聞て感悅するもの鮮なからず、顧ふに聲音なるものは一種至施の勢力ありて、其力能く人身を顫動し、人をして種々の情念並に意思を感發せしむ、思ふに聲音の耳に入るや、唯實物自然の理に循ふに過きす、而して其力現に人の精神を動かして復た体格に止まらさるは抑何の理ぞや、是れ固より未だ知り易からざるなり、ランドン氏曰く音樂は早年よりして有益の科なり、唱歌の如きは情の研究上に頗る有益の箇條を添ふるものにして、取分け愛國の事柄を啄せるもの及び家庭の生活に緣故あるものに於て殊に然りとす、アッセル氏曰く音樂と圖畫は幼年教育の必須科なり、之を專修して上達せしむることは勿論時と金とを要するなり、假令拔群の上達を以て目的とせざるも、父母たるものは宜しく其兒猶幼年なる時に當り、期に遲れずして誠に之を課すべし(勿論學校の唱歌時間の外に課するの意)、若し之に依て其天才なきことを發現するも、其試み學びたる事は其身の所有物となるなり、決して無用の金と時とを費消せしにあらず、何となれば之に依て幾分か其兒の美術思想を養成せるを以てなり、余は殊に音樂に於て其價値の大なるを信するなり、聽官な(ママ)發達するの價値は教育家として不同意を表するものなし、其性情及德義に關する効力の大なるは開明諸國學校に唱歌音樂を課せる所以なり、音樂は美術中尤も普通に了解せらるゝもの也、故に音樂は人民一般の美術思想を養ふに最も恰當なるなり云々　(未完)

著書に『平民學校論略』『實驗音響學及音樂理論』『放射線の話』『參考用實驗音響學』などがある。